

ART ESSAY

アート★エッセイ

生命のあかし

芸術は人間たちが造っている。ネコやイヌが造っているのではない。私はネコやイヌに生まれてこなくて本当によかったとつくづく思う。それは創造の現場に自らが精魂をこめて立ち会って、完成したときの深い深い感動の時間にたどりついたときに、最も強く感じる。

私は人間として生まれなければ味わえない芸術の道を歩み続けて何十年と美を造り続けてきた。それは日々、険しい道のりであった。のめり込めばのめり込む程、嵐が吹きすさぶ日もあった。心が高揚することも、傷つくこともあったが、その度々に心を奮い起こして立ち上がってきた。この歳になってつくづく思うのは、人生を歩む上で一番大切なことは、生きることに勇気をもって闘うということ。この決意は私が芸術を志した十代の頃から連綿と続いた、心からの自分への教えであった。果敢な勇気と克己心をもって一人で人生と渡り合ってきた。そのために今日まで芸術に挑戦し続けてこられたのだ。キャンバスや紙の上、また他の手段をもって、私はこれからも闘いつづけるだろう。

草間 彌生
(アーティスト)



肉体はもろい。限りがある。そして滅びる。だが、芸術は永遠である。そのことを知るために何十年もかかった。そして、もろい肉体が私の心にささやきつづけてきたものは、生まれ出でた「人間の愛憎」への讃歌。人生は華麗の極みである。

心が傷ついたときはいつも自分に言ってきかせている、「愛はとこしえ」と。そう言い続けてきた人間の死や生や生き様、そして絢爛とした人生の息衝き。私はこのことを感知しいつも感動を新たにしている毎日である。

何千回も繰り返し自分に言いきかせてきたのは、「愛はとこしえ」であるということ。この感動をあかしとするのはキャンバスや絵の具や彫刻である。

私は地の果てまでも、愛を携えて人間への鎮魂歌を歌い続けていきたい。「愛はとこしえ」。なんというやすらぎをもった響きであろう。

私の芸術はこうした中から生まれ出でた、様々な要素をもった作品群である。

(くさま やよい)



広島現代美術館での個展にて
(2005.2.22~4.17)

特集

先生が変わる! 授業が変わる!

第 2 回

小学校から学ぶ、中学校から学ぶ

サナギの時代

人の一生を蝶に例えると、思春期というのはサナギの時代です。サナギは硬い殻に覆われていて、外から見るとあまり変化がありませんが、その中ではドラマチックに変化が進行しているのでしょう。サナギの中では幼虫から蝶になるために、今までの成長とはちょっとレベルの違う「変身」が進行しています。

子どもたちの平均的な発達過程では、12歳ごろから17歳頃の間思春期があると言われており、中学生前後に思春期にはいる子が多いようです。思春期にはいった子は身体的な変化が著しいために周りの人たちはそちらの方に目が行きがちですが、目には見えない心の中は地中のマグマのように激しく動いていて、子どもたち自身が自分は何者なのか不安を感じながら心の変化をもてあましているのかもしれない。

子どもにとって小学校から中学校に進学するということは、一つのカルチャーショックです。造形活動の時間も図画工作から美術に変わり、未知のことが多く、最初のうちは緊張しがちですが、この新鮮な緊張感はサナギの時代の大切な経験です。この時代に何より大切なことは、自由な思いを込めて行う造形活動を十分に楽しむことだと思います。

自由に思いを込めて行う造形活動は心の表出です。図画工作や美術の作品は、一人ひとりの感性のフィルターを通して心の中を映した鏡のようなもので、このような造形活動を存分にさせることは子どもたちの成長に欠くことのできない大切なことなのです。

では、一人ひとりの子どもたちが夢中になり自分の思いを込めた造形活動ができるようになるためには、サナギの時代を指導する教師は何をしたらよいのでしょうか。

小学校の教師はサナギが蝶になった姿を思い、中学校の教師は幼虫の頃の姿を思いながら「小学校から学ぶ、中学校から学ぶ」という気持ちを大切にサナギたちの成長を温かく支援したいものです。

座談会「小学校から学ぶ、中学校から学ぶ」

山口 佳奈美 先生(東京都立川市立第三小学校)
 古澤 圭子 先生(千葉県柏市立中原小学校)
 奥長 英樹 先生(東京都世田谷区立船橋中学校)
 長澤 博昭 先生(神奈川県横浜市立寛政中学校)
 司会: 藤澤 英昭 先生(千葉大学)

1. 小学校と中学校での「子ども」の違い

藤澤 まずお話しいただきたいのは、小学生が中学生になるときに、子どもに起こっている変化についてです。

特に、造形活動に関して、小学生と中学生はどこが違うのか、あるいは6歳から15歳まででどんな変化があるのか、お気づきのところをお話してください。

山口 私が中学校から小学校へ異動してきたときには、カルチャーショックという大げさですが、最初の1年目は、「国境を越えてきたな」というイメージがありました。

子どもたちのパワーもすごいし、気がつく私の手を引っ張って「先生、先生！来て！見て！」というのが中学年で、高学年の子どもたちも、適切な題材提案をすればかなり乗ってくれるなどという感じがありました。

中学校ですと、どうしても、成績や時間数などの大きな制約の中で美術科と関わらなければなりません。しかし、小学校では、時間数は減っていて、現場では「厳しい」という声が聞こえながらも、2時間連続してできる、という時間のゆとりと、子どもたちも低学年のころから「図工室は楽しい」という環境で育っているため、子どもの「やりたい」という前向きなパワーが真っ先に感じられました。

また、子どもたちは、小学6年生ぐらいからぐっと中学生に近づいてくる感じがします。

私は図工専科として小学3年生から4年間子どもたちと関わっていますが、幼かった子どもたちが成長していった6年生ぐらいになると、特に男の子なんかは見方が変わったり、描き方が大人びてきたりと、すごく変わってくる印象を受けたりします。

藤澤 小学校では、最初の授業の立ち上げのときの子どもの「ノリ」の違いというのがありますよね。先生が説明しているときから、お尻がもうズズズ動いていて、「先生、早く引っ込め」という子どもの気持ちがまっすぐ伝わってきます。

しかし、中学生だと、先生が最後まで説明し終わるまで、ちょっと引ききり話を聞いていて、説明が終わってから「そろそろやるか」という雰囲気を感じることもあります。

山口先生の話をしていると、小学校と中学校を合わせて9年間になったらいいな、そんなことがあり得るかなと思いました。

古澤 私も小学校へ異動になったときにも、同じような体験をしています。子どもに対して言葉が通じない、というレベルから勉強しなければならなかったですね。

しかし、子どもの意欲だけは伝わってくるので、異動したときにはそのパワーに負けないようにやっていました。小学校では、技能の問題よりもまず「思い」が先だと思うんです。

ただ、小学5、6年生になると、作品を見る人の目というもの意識することも始まりますし、ただ「つくりたい」というだけじゃなく、「こうつくりたい」とか、「こうしてみたい」という、「自我の目覚め」というか、自分中でのこだわりが増えてくるのではないかと、思います。

そのこだわりについても、自分の枠の中で満足するだけでなく、見た人がどう思うかということまで意識するようになっていくと思います。自分の個性を出しながらまわりの目も意識する、ということですね。

藤澤 いろいろなものを見てきているから、自分なりに要求水準というもの、自分の中に出てくるわけですね。それと、自分ができる技能のレベルとのギャップが、かなり意識されるようになるということでしょうね。

それは大体小学校の高学年から？

古澤 早い子だと5年生ぐらいですね。おもしろいのは、今まで、「ねえ、先生」って言っていた子が、5、6年生になると、「おはようございます、先生」というように、子どもの接し方も変わってくるんです。大人同士の関係になりたがるんですよ。そこが子ども自身の表現も変わってくるタイミングだと思っていますね。



古澤 圭子 先生

藤澤 なるほど。大人同士の関係、とはおもしろい話が出てきましたが、奥長先生、今のお話を聞いていかがでしょうか。
 奥長 私は中学校の2、3年生の担任を経験してから日本人学校に異動したのですが、現地で初めて小学3年生を担当することになりました。

最初の授業の時に、衝撃を受けました。授業の際には、自分に子どもの視線が突き刺さってくるような感じがするくらい、こちらが言おうとしていることを真剣に聞こうとしていたので、かえって自分が言っていることが不安になったくらいです。制作の最中も本当に楽しそうで、作品が壊れたり自分の思っていたとおりにならなくても、その過程を楽しみながらつくっているんですね。そのときまで中学校しか知らなかった私にとっては、非常に新鮮な感じでした。

その次の年に、今度は小学6年生の担任になりました。普段の生活では子どもっぽい子も多かったのですが、子どもの表現や授業での様子を見てみると、そんなにノリがよくない。ある一瞬に間があるような感じがしました。

ただ、「これはノリかすごくいいな」と感じたのは、六角の箱をつくったときでした。方眼の目盛りが入っている紙を使って、その上に自分で設計図を書いて制作することにしました。

そのときは、形をつくる作業だけだったのですが、「こうやる」ということが決まっていたので、子どもたちにとってはかえって楽だったのかもしれない。子ども自身が持っている足かせをはずしてあげることも必要なのでは、と感じました。

その後、中学校に戻ってきて、あらためて中学生を見ると、いろんな経験をしてきている分、子どもの中で「積み重ねの結果主義」というか、自分のやったことの成果が気になるような部分が、自然に蓄積されているように感じましたね。

藤澤 小学校の高学年から中学生にかけての美術実践の中で、



藤澤 英昭 先生

「やる事がわかっていると、一生懸命やる」ということでしたが、ある意味で、これは危険だと思いますね。レタリングなどもそうですが、あらかじめやる事が決まってしまうわけですから、目指すところが簡単に分かり、そこで安心してしまふんですね。また、「磨く」という作業になると、延々と、ツルツルに

なるまで磨いているということもあるそうです。

しかし、そこには、どんどん自己変容させていく、ということ拒否しているような面もあるわけですから、何らかの危険性をはらんでいると私は考えています。そのあたり、長澤先生はどのように感じていらっしゃいますか？

長澤 中学生の3年間の生活を見ていると、今のお三方のお話と同じような流れを感じます。

先ほど、小学校の高学年になると、自分の表現に目覚めて「人と比べて」という話がありましたが、それと同じようなことを中学校でも繰り返しているように感じます。

また9年間の小中一貫教育という話がありましたが、そうなると同じ人間関係で9年間やっていった場合、「1回立ち戻る」という11~12歳の間のものがなくなるわけですね。

それがいいのか悪いのかわかりませんが、今の私は、中学1年生という時期が「もう1回ゼロからやり直せるぞ」と、新しく方向性を見つけ直すようなチャンスにもなっているのかなという感じがしています。

それから、中学校と小学校とで大きく違う点は、評価があり、そこから進路の問題があります。ですから、授業の中で純粋に表現を楽しんでくれているのかということについては、教員としていつも心配を抱えています。

といっても、パワーは中学生にもあると思います。だから、最後までそれをなくさないで、授業中はもちろん、授業外の時間でも自主的に取り組めるようにしていくのが、教師の役目だと思っています。



長澤 博昭 先生

また、コツコツ磨いたりなどの単調な作業そのものをいつまでも続けてしまうことがある、という話がありましたが、精神的な不安をたくさん抱えている年頃ですので、子どもたちの中に何か求めるものがあると思うんですね。

個人的な話で恐縮ですが、私は刃物を研ぐのが好きなんです。

道具の手入れにかこつけてお話ししますが、大きなパワーでものをつくる時のエネルギーと、細心の注意を払って道具の手入れなどの作業に集中するときのエネルギー、そしてコツコツ作業のエネルギーというのは、創造の為のエネルギーとして同等なものだと考えています。

藤澤 小学校と中学校を一貫すると、人間関係とかいろんなことを含めて、リセットするチャンスがなくなってしまうというのは問題ですね。

また、中学生は現実の問題でいっぱい不安を抱えていて、制度上で抜き差しならないこともあるわけです。

そんな中で美術というものがどのような立場にあるかというのは、難しい問題ではありますよね。

ただ、一般論として言えば、「漫画家になりたい」、「イラストレーターになりたい」、「ヘアデザイナーになりたい」という、広い意味で美術・造形に関わった職業につきたいという気持ちや方向性が芽生えてくるのも、中学生には多く見られます。

だから、子どもが持っているクリエイティブなエネルギーをいつまでも持ち続けていってもらいたいと、皆さんも思っていると思うんです。

少なくとも、小学校と中学校を一貫にすると小学校を5年でやめて残りの4年間を中学校にするとかの議論の前に、いろいろな試みを行う必要がありますね。

2. それぞれの指導実践紹介

藤澤 それでは、先生方にいくつか意欲的な、おもしろい作品を持っていただいていますので、小学校からのアプローチと中学校からのアプローチの違い、あるいは題材展開の仕方のアドバイスなどをいただけるとありがたいと思います。奥長先生には、時計の作品を持ってきていただいていますね。

奥長 この時計の実践のきっかけは、3年間の中学生生活の最後に、自分で材料を選んで、自分だけの表現をしてみよう、という提案をしたのが始まりでした。

機械の機構部分は工夫をしようとしてもどうにもなりません。しかし、あとの部分は、生徒の発想を生かしていくことができます。材料も一人ひとりにあったものを個人で用意していましたね。

中学3年生なので、それぞれ評価が気になる時期でしたが、発想とか、素材を選んだ理由とか、それをどう加工するかということなどから、その子らしさというのを何とか実現させてあげたいと思いながら授業を進めることができたと思います。

また、今日は持ち運びのできる、また壊れにくい作品ということで、女の子の作品を持ってきたのですが、男の子は便器の形をつくりたり、モンスターをはりこの要領をつくりたりしています。洋式のトイレをつかって、その中で時計を動かしたりしていたものもありました。あと、大きさという意味では、男の子のほうが思い切りがよいですね。

藤澤 中学生の場合は、最初にイメージがあって、そこに近づけてつくる場合が多いと思います。小学生のように、途中でガラッと変わってしまう場合もありますか？

奥長 こういうテーマだとありますね。最初にアイデアスケッチをする子もいますが、それを奨励してはいないので、やっていくうちにどんどん変えていく子もいます。

この子の場合も「草履」というイメージがもともとあった



「夏の思い出」(奥長先生指導実践作品)

わけではないようで、途中で思い切っとうしてみようというきっかけがあったようですね。

古澤 自分の思いを作品にしたい、ということですね。

奥長 はい。授業はそれに答えることばかりで終わってしまいます。

古澤 中学生の場合、自分イコール作品という、自分の分身のようなつくり方をすることがありますよね。

奥長 そうですね。ある意味、ちゃんと残らないと、自己嫌悪になる部分も中学生にはありますね。

藤澤 これは、基本的には、扱う材料はフリーですよ。そうすると、1人ひとりの生徒は材料が違うわけだから、用具も違って、1人ひとりが材料と格闘しているという授業の場面になりますね。

長澤先生にも作品をお持ちいただいています。

長澤 まず、1年生の人物画です。入学した1年生には、一番最初に、自画像とまでいきませんが、「自分」というテーマ



奥長 英樹先生

で描かせています。しかし、絵のうまい子はよいのですが「図工が嫌いだった」という子はどうしよう、と考えた結果、「好きなものを描いて、それを自分の好きな人物画にしよう」ということにしたんです。

そうすると、生徒は「ほんとにいいの？」と戸惑いながらも、自分で制作していきました。

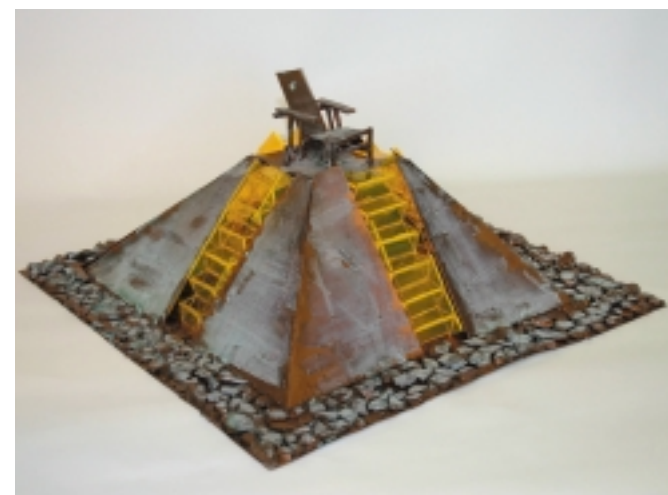
2年生の段階のものとしては、銅板画とか、この線のものとかです。



「線に祈りをこめて 一ゆれる思い」(長澤先生指導実践作品)

線のものというのは、先ほどのコツコツ作業です。ただコツコツ磨くだけだと誰でも同じなので、そこから個性が出るんじゃないかというように考えて、実践しました。生徒たちは、本当にはまっていましたね。その線の模様をさせるときには、冗談半分、本気半分で、お香をたいて、インドの音楽をかけていました。このコツコツみたいなのも、中学校では「燃える授業」に持っていけるポイントの一つなのかなと思っています。

子どもたちは自分で表現したいものを見つけない、また3年生になったときには、先ほどから話があったように、人と



「椅子のある風景 一幸せの時間」(長澤先生指導実践作品)

違うことをしたい、と感じられるようになります。それが見つかると、授業は燃えます。

それと、こちらは最近の実践です。「椅子のある風景」というもので、「心象風景をつくってみよう」という題材です。椅子はプロの作家がデザインされたものをたくさん紹介しました。

椅子のデザインの勉強もさせながら、授業をしている感覚ですね。子どもたちは、結構おもしろい作品をたくさんつくってくれました。

山口 顔を描くには抵抗があるでしょう？

長澤 ありますね。

山口 それが今悩んでいるところです。6年生は最後だから、自画像を1回ぐらい描かせたいと思うんですが、「顔を描いて」と言うと、子どもからかなり拒否反応があるんですよ。友だちならいいけど、自分のは嫌だって…。

長澤先生の場合、スタートの時点で描かせるというのが、新鮮に感じました。しかも、「いろんな表現の仕方を見つけていいんだ」と最初に言ってあげるの、すごくいいステップだなと思いましたね。

古澤 「ほんとにいいの？」なんて、生徒が言うのもすばらしいですね。

藤澤 山口先生にも、小学校の作品をたくさんお持ちいただいています。ご紹介いただけますか。

山口 いくつかの題材を持ってきました。ストレートに見て描いたものとして、3年生の「だいこん」と5年生の木炭画「びん」です。だいこんは早朝農家のおじさんと畑で待ち合わせをして、その場で引っこ抜いたのものを、そのまま図工室へ持ち込みました。まさに「新鮮ネタ」(笑)。とにかく対象そのもの持っている生命感がすごい。それが自然に子どもに絵を描かせてしまうのです。みずみずしく重量感があります。

「びん」の方は、描画材との新鮮な出会いをねらいました。木炭で手を真っ黒にしなが、パンで消すことによって描きだして行く。デッサンとしてどうの、という前に触覚的に描く体験をさせたかった。どちらも子どもたちは楽しんで描いていましたよ。

包装紙やチラシなどの印刷物をコラージュする手法もよく使います。ゼロから何かを発想するより、手にして選ぶことから始めるほうが引き出しやすいので。

また、こちらは鑑賞とからめた作品です。5年生の「日本のこころ」は、美術館から送られてきた日本美術の展覧会のチラシを作品に使わせてもらいました。気に入った部分を切りとって画面に貼り、さらに絵の具などで自分のイメージを



「大きな大根」と「ウイスキー」(山口先生指導実践作品)



「色と色との出会い」(山口先生指導実践作品)

重ねて描きこんでいったものです。子どもなりの日本の印象です。

藤澤 技法としてはコラージュですが、通常とは意味合いの違った絵画の実践例を拝見しました。また、描画材料として非常に画期的な木炭を使った作品もありますね。

これらの作品を見て、中学校の先生方から一言だけですか。

奥長 山口先生が指導実践された作品を見ると、子どもの思いが体のいろいろなところを通して出ているという感じがします。その思いの根元では中学生も同じだと思います。

中学生になると、ある自分なりの回路を通して表現してい

ます。その回路の中から、余計な規制や不安など心配な部分を引っ張ってくるのではなく、自分が思ったとおりに出していいんだというところを分かってくれば、というのをすごく感じました。

長澤 先ほど「中学生のパワーもあるよ」と言いましたが、小学生のパワーはすごいと思いました。

中学生が小学生に負けているとは思いませんが、その素直なパワーというのは大事にしたいなと考えます。技術ではなくて、思いがそのまま表現に出ているというあたりが、うまい、下手を超えた大事なものだと感じました。

藤澤 本当に子どものパワーはすごいですね。

今日見せていただいた作品は、中学校の作品もすごくおもしろいのですが、小学校の児童は、とにかく思いがあって、前後のプレーキ要素がなく、それを活動に移している、その時間の蓄積というパワーは圧倒的に感じますよね。

そういった子どものパワーを表現するということに対する自信というものは、持ち続けていって、中学生にまで広げていってあげたいなと感じます。

3. 小学校と中学校との交流事情

藤澤 ところで、山口先生と古澤先生は中学校から小学校へと校種が変わっていらっしゃいますが、小学校の先生が中学校の教科書を持っている、またその反対の事例を耳にしたことはありますか。

山口 ないですね。予算のこともあるでしょうし、現場の先生に配る教科書の冊数も結構シビアですから、指導に使わない教科書を配るということはずるいかならないですね。手に入れるには、自分で買う以外はありませぬ。

長澤 私も、小学校の教科書を持っているという先生はほとんど聞かないですね。

藤澤 各小学校においても、図工研究を推進している主任の先生はいらっしゃるわけですから、その地区で採用されている中学校の美術の教科書くらいは、本当は持っているべきだと思いますね。

また逆に、小学校の6年間の積み重ねで、例えば、この校区の子どもたちはどんな授業を経験してきているのか、ということが中学校の先生に伝わっていると、中学校側としてはすごく楽ですよ。

古澤 中学校の先生が、授業内で教科書を使うということは多いんですか。

長澤 教科書に載っているものは基本的に授業ではやらないですね。これは個人的な使い方ですが、自分でも一度見て、生徒たちにも「君たちに合うような形でやる」という紹介の

仕方をしています。

古澤 長澤先生のような先生に教わる子どもはとても幸せだと思います。ただ、教科書は一読しておくけれども、子どもたちのことをあまり考えないで自分の過去の経験に基づいたカリキュラムを立てる先生もいらっしゃいますよね。

ということは、中学校の先生方の中に時代遅れの考え方をしている人が多くなっているということも言えますよね。

長澤 多いということはないと思いますが、いらっしゃることは確かです。

中学校では、学校に1人しか美術の教師がいないというケースが多いです。そのうえ研究会にも顔を出さないということになると、自分の世界に入り込んでしまっていて、それが子どもに影響してくる、という危険性がありますね。

山口 私が中学校から小学校に異動したとき、小学校の先生は私が疑問にも思っていなかったことに疑問を持っているということ、すごく感じました。

例えば、美術大学を出てそのまま中学校の教員になると、大部分の方が自分が積んできた知識や経験に、疑問を持っていないと思います。

私も、中学校で「上履きをデッサンしましょう」とか「自分のシューズを粘土でつくりましょう」と、自分が生徒にやらせていたことに対して、何の疑問も持っていませんでした。

ある時、小学校の先生に「どうして靴を選んだの」、「その靴にどんな思い入れがあるの」と聞かれて、「そういう視点で見えていなかった」と気づいたりすることがありました。

そういった意味で、子どもの生活の中で思い入れのあるテーマを選んだり、自分が経験、生活してきたことの中から、「これがいいんだ」とピックアップしてあげるという教師側の意識が大切だと思いますね。

また、最近では、教科だけでなく、その学年の子どもたちが、他の教科でどんな勉強をしているのかということも意識しています。子どもたちが他の教科でいつ頃、どのような学習をしているのか、そうだったらこの時期にこの学年の先生とこんなことをしてみよう、といった感じです。

その場合、たいていは他の先生からは歩み寄ってこないで、こちらからひよろひよろと寄って行って、「こういうことをやりましょう」と、ネタを提案していくという形をとっていますね。

中学校にいたときは、自分が美術そのものを専門的に勉強してしまっただけですから、ちょっと押しつけ過ぎていたかなという感じがしています。

古澤 私もそうでした。美大で教育よりも美術の専門の方を選んだので、最初の頃は山口先生と同じような状態でした。

自分から新しい情報を求めるには、研究会に出られなくても、例えばインターネットで情報を探すぐわがまわりの情勢などがすぐわかりますし、そういう自分以外の世界を知るということは大切だと思うんです。

市や区の展覧会に行ったり、小・中学校での展覧会をお互いに見に行けば、非常にいいと思います。その1歩が踏み出せないのが問題なのかなと、今感じているところです。

山口 そういった場では、特に、6年生でやっていることと、中1で何をやるかということのすり合わせができるといいなと、すごく感じます。

小・中連携の一環で、地域の中学校を訪問して授業を見せてもらうことや、逆に中学校の先生が小学校に来て、感想を言い合うことがあります。しかし、題材などの教科の専門的なすり合わせまでは、現実にはなかなかできないで終わってしまうんです。

実際に、私の勤務している立川市でも、小・中で合同展をやっていて、展覧会の最後の日に作品を見ながら小・中両方の先生方で懇談するのですが、話はなかなか深まらないですね。

古澤 話が通じなくなって、結局「小学校は小学校だけで話しましょう。中学校は中学校だけで話しましょう」ということになってしまうんですね。

藤澤 今回のようなやり取りが小・中学校の間で行われていれば、中学校の先生も、「小学校ではここまでやってくれているんだ」という自信を持って、ある意味思い切って授業を進められるところがあるかもしれませんね。

長澤 私の勤めている地域では、小学校に中学校の作品を持って行っています。作品展があるときに、中学生のスペースを設けてもらって、「中学校ではこんな作品をつくりました」ということで、並べてもらうんです。

しかも、小学校の先生は感想を書かせて、それを中学校に持ってきてくれるんです。小学生の素直な言葉で感想をもらえるんですね。これは、教員同士の交流に勝るとも劣らない効果があるかなと思っています。

藤澤 お互いに公開して、それぞれ展示するというのは、いい発想ですね。



山口 佳奈美先生

長澤 中学生は、自分の母校ですから、小学校には行きやすいですね。

山口 小学校の方でも、「あの子がこんな作品を描いている、つくっている」というのを見るのは、楽しいですよ。

古澤 先生方を交流させるというのは、よくありますよね。しかし、本当は「子どもたちが交流する」というのが一番手っとり早いのかもしれません。

長澤 地域だったら、割と素直にできそうですね。実際に、私の前任校では、小学校・中学校の先生と児童・生徒とが、1日授業交流をしていました。美術だけでなく、料理をつくったり、七宝焼きをやったりしていました。そして、中学生が小学生を教えたり、先生が両方いっぺんに教えたりしていました。

ただ、これは準備が大変なので、そこまで行かなくても、もっと簡単な方法でできることがいろいろあると思います。

山口 小・中連携もただ授業を見に行くだけでなく、授業に参加してもらうというのがありますね。

藤澤 そうですね。また最近では、地域の教育施設を橋渡しにして、小学校と中学校の壁を取り除いていこうとしている地域もあります。

これは授業ではないので、評価、評定には余りウエイトがかかっていないわけです。その分、子どもたちも主体的に参加できるようになっています。また、地域ぐるみの活動だと、子どもたちもうまく馴染むんでしょね。

古澤 ある小学校の先生は、地域を巻き込んで実践を行っていますよね。「学校ミュージアム」というもので、以前に森ビルの方を呼んで行ったワークショップの結果を発表する場として立ち上げていらっしゃるんです。学校全体で全員の作品を展示してありましたね。

そして、ビデオを回すためにモニターが必要だったら、近所の電気屋さんから借りてくるとか、そういう地域での交流がすごく密で、素晴らしいなと思いました。

藤澤 気持ちさえあれば、そういうこともできるというわけですよ。



「りんご」と「チューリップ」(奥長先生指導実践作品)

4. 「小学校から学ぶ、中学校から学ぶ」

藤澤 日本全国にもいろいろな地域がありますし、いろいろな事情もあるかと思いますが。小学校と中学校のよりよい連携について、全国の先生に向けてのメッセージを、先生方から一言ずつお願いしたいと思います。

奥長 小学生も中学生も、自分らしくありたいとか、自分らしくものを発想したい、という部分があると思うんです。

小学生だと「子どもらしさ」ということで、それが個性だと言われたりするんですが、中学生でも、個性の部分はすごくあります。

だから、美術の授業の中でも、自分の個性を出させてあげたり、自分が納得してできるものを実現させてあげたいということを、一番強く思っています。

ただでさえ、中学生になりたての頃は「並ぶときはこうしなさい」、「制服を着たらこうしなさい」というのがあるわけですから、「図画工作じゃなく美術だから、こうしなくちゃ」というように思っているんですね。ですから、「そんなことないんだよ」ということを、最初に分かってほしいと思っています。また、私の中学校では、校長が推進役になって地域の方と活動している「理科教育」(サイエンスアドベンチャー)というものがあります。

そのように、私のまわりにも近くの学校と連携する地盤はあるんですが、先生同士が交流するのは難しいですね。先生方の中にも壁があるようで、なかなかうまくいきません。

そんな中、地域では「文化村」というものをつくって、陶芸をやったりオーケストラを編成したりという活動がありますが、そういった活動に先生方も触発されているような気がしますね。自分も造形という観点で、交換授業などもぜひやれたらなと思いました。

古澤 奥長先生からお話がありましたが、地域から教師を動かす雰囲気がある、というのはとてもいいことだと思います。地域の人たちが「先生もっと動いて」という提案を、どんどんしてもらいたいですね。

学校総体としても、図画工作や美術の先生方をもっと外に出してもらえるようなシステムが具体的に出てくれば、もう少し先生方も動けるのではないかと思います。

特に、図工・美術の教育の必要性を訴えたいのに授業数が減少している中で「やっぱり必要なんだ」ということをアピールするためには、教師が表に向かって発信する場が必要です。

少し極端な発想ですが、必要に迫られる状態まで持っていくという意味で、各地で行政側に「小・中学校の作品交流を年に1回やりましょう」と具体的に提案してほしいと思っ

ています。それくらいの指導を具体的にやってもらったほうが、絶対に先生方も動けますよね。それが今すぐくじれたいという思いがあります。

山口 小・中学校の教員が交流するというのは、現実的にはなかなか、特に、時間的な制約とか、それぞれの校務のあり方が違うので厳しいかもしれません。しかし、先ほどの作品交流という話題がありましたが、子どもの作品というのは、指導した教師が思っている以上に、置かせてもらうだけですごいメッセージを発すると思うんですね。

そういうことで、私もここ数年、地域の施設に子どもの作品を置かせてもらっています。地域の大人の方の反応とか声が子どもにフィードバックしてくると、子どもはすごく励みになりますし、教師の方も元気づけられます。

あとは、やはり、目の前にいる子どもは生きていますから、今この子たちに必要な教科からの学びって何だろう、ということも意識する必要があると思います。

例年やっているからこの題材とか、教科書に出ているからという発想から抜けて、いつも新しい題材を探して、必要なものを子どもたちの前に並べてあげるというところまでが、教師の大きな仕事だと思います。

並べてあげたら、あとは子どもに選ばせたり、決定させるという力をつけさせるという意識で授業をしていかなければならないと思います。線路に乗せるのでもなく、完全な放牧でもなく、ガードレール程度の中で「ちょっとのびのびやってみない?」という提案ができるといいかなと思っています。また、夏期休業中にも小・中学校での作品研究会とかができたら楽しいと思いますし、作品があると話も弾むかなと思います。

長澤 子どもに、図工・美術として何を教えるか、どんな力を身につけさせたいのかということ、どんな題材で授業をやるにしても常に考えてから子どもに下ろさなければならぬ、と感じています。ただ楽しいだけでもいけないし、嫌いになってしまったらもったいないですね。

今やっている授業がこの子の将来にわたって何をもたらすのか、また私はこの子に何を与えてあげたいんだろう、見つけさせてあげたいんだろう、ということを教師の側から考え



「夕陽とともに遊びに来る神」(山口先生指導実践作品)

ていくことが大事だと思いました。

それから、今日の話の中で、ずっと私の頭の中に響いているのは、「パワー」という言葉です。小学生のパワー、中学生のパワー。しかし、それ以上に、我々教員がパワーを持っていないとやっていけないんだと思います。

美術の場合には、本当は図画工作よりも教科としての境界線が曖昧模糊なところがあって、例えば国語や理科の先生のところにも教科の関連でひよろひよろと寄って行ける。社会なんかすぐに寄って行けますよね。

そういったところで、まず学校内に「美術の先生がいなかったら大変だ。つなぎがなくなってしまう」、「学校が寂しくなってしまった」と感じさせるような、個々の先生のパワーというものが無いといけないんだろうなと自分に言い聞かせています。

それから、学校から先生が出られるようにというご発言もありました。それも大事だと思います。

ちなみに、奥長先生から陶芸の話がありましたが、私も、地域に陶芸を広げようと思ひまして、陶芸教室を年に何度か開いています。

そこでは、初めは地域のお母さん方を対象にした「PTA陶芸教室」だったんですが、どうしてもその場の雰囲気固くなり、私自身も緊張してやりづらかったものですから、「ぜひお子さんをつれてきてください。小学生を」と言いました。

次の機会に、私は美術部を持っていますので、生徒たちに「今年からは君たちが先生をやりなさい」と言いました。私は一番前で腕組み気分でした(笑)。

それがかえって評判がよくて、「あのお兄さんお姉さんたちが教えてくれるんだから行こうよ」とお母さん方が子どもたちを連れて来てくれるようになりました。

それから、ある小学校からは「今度は夏休みに美術部の子どもたちを連れて小学校まで来てください」という注文までありまして、「やってみれば地域にもそうやって出ていけるんだな」ということを実感しました。

地域や学校で、「美術の先生ってやっぱりいるといいな」という声がたくさん出てくるような教師でありたいと思っています。

藤澤 4人の先生から非常に示唆に富んだお話をいただきました。

この座談会が公開される時期には、いろいろな研究会の企画であるとか、計画が立ち上がってくるかと思っています。各地で研究的な視点を持って、そういった活動をぜひ実りあるものにしていただきたいと思っています。

本日は貴重なお話を本当にありがとうございました。



—震災10年 造形を通したメッセージ—

～中学校の「してきたコト。これからするコト…」～

(第4回 神戸っ子アートフェスティバルから)

兵庫県神戸市立須佐野中学校 西崎 渉

1. 「見に来てほしい」

図工室や美術室で生まれた子どもたちの作品を、たくさんの人に「見に来てほしい」と思っている私たちの、このアートフェスティバルにかける思いは強い。子どもたちの純真無垢なハートから生まれてくる造形に絶対的な信頼をおいているからである。ぎこちないけれど、最後まであきらめずにつくった一生懸命さと、失敗を何度も乗り越えた小さなドラマに、完成したときの成就感と自信に、見に来てくれたたくさんの人たちが感動することを知っているのだ。展示空間にあふれる明るい色と素直な形は、生きているという喜びに満ちあふれる。たくさんの人たちの心は、そんな空気の中で活性化され、元気になっていくのである。

図画工作や美術という造形活動は実にいいものだ。

神戸は今年、阪神淡路大震災から10年を迎えた。6,433人のかけがえのないのちが奪われたこの街は、この10年の間に復興を遂げてきたが、まだまだたくさんの人たちの心は癒えていない。10年前、幼かった子どもたちは、大きくなった。生かされてきたいのちから生まれた造形作品を展示することで、この街で暮らしている人を元気づけよう——、そんな思いがあって、第4回アートフェスティバルはスタートした。

2. 阪神淡路大震災を経験した美術の先生



当日の会場風景



天井から吊られたシンボルバナー
幼稚園—元気いっぱい
小学校—
神戸の未来はぼくらの未来
みんなの元気が神戸の元気
中学校—
神戸の中学生、元気をとどけます。
盲・聾・養護学校—
かがやけ、君のその姿

阪神淡路大震災では、たくさんの方が避難所となり、授業が再開されるまでかなりの日数がかかっている。再開されても、満足に教室が使えるわけでもなく、また材料もなかなかそろわないという劣悪な教育環境に、私たちは立たされたのである。しかし気持ちだけは負けていなかった。何とか図画工作や美術の授業をしようと、奮闘努力したのである。

アートフェスティバルは、サブテーマを「つくりだそう夢・未来・神戸」としている。今年は、「震災10年 造形活動を通したメッセージ」という一文が付け加えられた。「神戸市の震災10年 神戸からの発信『してきたコト。これからするコト…』」を合い言葉とした先生方の熱い思いのこもった作品がならんだ。

—— 当時住吉中学校にいた小菅先生は ——

小菅先生は、中学2年生の子どもたちが描いた絵日記を出品された。「どうしても描かせたかった。周囲から反対の声も挙がっていたのだが——」と小菅先生は当時を振り返って言う。「今しかない。これを残すのは——」と強い思いがあったのである。

ぐちゃぐちゃになっていた準備室から画用紙と色鉛筆だけを取り出し、子どもたちに渡して描かせた作品からは、子どもたちの静かでするとい観察力が光っている。子どもたちが、一人ひとりきちんと震災と向き合っていたことがよくわかる。

展覧会の間、新聞などにも取り上げられ、当時絵日記を描いた生徒の保護者が見に来られた。感慨深そうに、じっと見

入る姿に、私の測り知ることのできない10年の年月の重さがあるような気がした。「今はご家族みなさん、お元気ですか?」「はい、元気にやっています」そんななにげない会話に、生かされてきたいのちを感じた。

小菅先生はすごい実践をされた。図画工作や美術は、人の歴史を背負うことができる。どんなに幼い子どもであっても、時代を映す証言者となり得る。その時を生きたと証になるのである。神戸には、人と防災未来センターがある。他府県からの来館者が多いと聞く。そんな施設に保管してもらい、たくさんの方々に見てもらえたらどんなにいいだろう。これらの作品は、永久に保存される価値がある、と私は強く思うのだ。



当時の絵日記(住吉中学校)

—— 当時鷹匠中学校にいた尾崎先生は ——

会場で、私に「24歳の孫から連絡があって——」と上品な言葉遣いで声をかけてきた年輩の方がおられる。お孫さんのお子さんの作品かと勝手に思いこんでいた私は、該当する名前がないことに気がつき、「もしかして、お孫さんが10年前に作られた作品ですか?」と聞くと、「孫の家に飾ってあるもので——」と答えられた。

展示されている作品を食い入るように見られていたおばあさんにも10年の歴史がある。紙粘土で作られた額の中のWE LOVE KOBEという文字が、心にしみる。制作されたお孫さんがこの10年の間、よくぞ捨てずに保管されていたものだと感動に近いものがこみあげてくる。家の中に飾ってあるのだ



「WE LOVE KOBE」(鷹匠中学校)

から、おそらくご家族の方は、これを見るたびに、震災当時を思いだすにちがいない。尾崎先生が、出品をお願いしたところ、ご家族の方たちは、大変喜んでいただくと耳にした。

この作品を制作した当時、鷹匠中学校は、避難所となっており、仮設校舎で授業をされていた。苦しい環境の中ではあるけれど、美術の授業では、笑顔がたくさんあったであろう。指導された尾崎先生は、とにかく人を包み込むような温かさがあった、その作品をいとおしむような感情が生徒にも伝わったのではないかと感じてしまう。その年の秋、毎年行われていた文化発表会は、規模を縮小して実施された。展示スペースが確保できずに、それでも仮設校舎の横に設置されていたネットにひっかける形で、このWE LOVE KOBEの額は何とか展示された。たくさんの方々に「WE LOVE KOBE」何度も繰り返し見られたこのフレーズは、きっと子どもたちの心を勇気づけたにちがいない。

—— 渚中学校の谷野先生は ——

渚中学校は、震災後に作られたHAT KOBEにある新しい学校である。地域には震災復興住宅があり、WHO、人と防災未来センター、赤十字病院など防災の拠点となる施設が多い。震災10年を迎えて谷野先生は、総合的な学習と美術とを関連づけ



Tシャツ制作の様子(渚中学校)

た、Tシャツづくりを思いつく。そして、子どもたちの集団をマーチャングイザー(企画・開発)、ディスプレイ(展示)、デザイナー(制作)の役割に分担し、それぞれの子どもたちが、自分の役割の責任を果たし、チームワークよく、かっこいいTシャツがたくさん誕生している。谷野先生は、「震災10年を、過去の悲しみより未来の明るさに目をむけられる節目にしたい」と話していた。そんな明るい感性は、壁面にならんだTシャツからも十分に伝わってくる。子どもたちのワイワイガヤガヤというにぎやかな声が聞こえてきそうであった。子どもたちの未来は、いつでも明るくなければならない、そんな願いが、子どもたちにも伝わった取り組みである。

——伊川谷中学校米田先生・長谷川先生は——

巨大な原寸大の仁王像が展示された。鑑賞者を圧倒する大きさである。総合的な学習で2年生全員が制作にかかわった。震災10年を意識して制作されたものではないとしても、生徒のエネルギーを十分感じさせるものである。校舎の4階から吊られた作品の全景写真には、驚くばかりだが、何よりも注目したいのは、なぜ仁王像なのかということだ。そして、なぜ震災10年の節目にこの作品が、展示されることになったのか——私は、縁を感じるのだ。偶然なのかもしれないが、自然災害であった震災に対して、人間を超越したところの怒りの表現として解釈するのは、突拍子もないことなのだろうか。図画工作や美術の授業から生まれた子どもたちの作品が、当初の意図とは別に、時として時代そのものを表していたり、個を超えた何か大きなインスピレーションを引き起こすことがあるが、この仁王像の作品からもそのことを感じるのである。

伊川谷中学校では、全校をあげて、竹を切り、ろうそくをともし、グラウンドに「いのち」という文字を浮かびあがらせるというインスタレーションも行われた。



巨大な仁王像の展示(伊川谷中学校)

3. わたしの学校の取り組み

——「この街が好きの人100人集めよう」——

震災後、地球市民ということばが生まれたことからわかるが、震災を通して強くなった人と人のつながりが、神戸の街の復興の原動力となったことは、周知の事実である。震災

直後のボランティアの方による支援は、本当に温かい人情味あふれるものであった。私の勤めている須佐野中学校は、神戸の下町にある。震災当時は、体育館や教室が避難所となり、生徒の中には、数か月間ここで生活した者もいる。しかし月日が経つに連れて、人と人のつながりが薄くなり、若い人がどんどん地域から出ていって寂しくなるという声が届き始めていた。

そんなときに、総合的な学習「郷土と美術の写真」の関連で、震災後大事にされた人と人のつながりをもう一度考えるという試みから、中学2年生の子どもたちにカメラを渡し、この街を好きな人を撮る、インタビューをするという学習を展開した。



「この街が好きの人100人集めよう」より

子どもたちの撮ってきた写真には、いい笑顔があった。人は人の笑顔で元気になる、そんなあたりまえのことが形となって現れた。この街の好きなところが、どんどん出てきて、そのよさを再発見し、またそれを共有できる喜びが子どもたちにあったことは、言うまでもない。

——「手のひらを太陽に」プロジェクト——

今、生かされているいのちは、だれかのいのちを生かすことができるという信念が私にはある。震災後、いのちということばにとっても敏感になっている。受験を前にした中学3年生にこのいのちをテーマとした授業を考えていたとき、新潟中越地震が起きた。TVに映る画面が、10年前を呼び起こす。大きな災害で悲しい思いをしている人たちの心を元気づけたくて、11月末から3年生の授業で制作した。今年何度となく耳にしていた明るい「手のひらを太陽にすかしてみれば、真っ赤に流れるほくの血潮、みんなみんな生きているんだ、友だちなんだ」のフレーズと結びついて、「手のひらを太陽に」プロジェクトが生まれた。

子どもたちは、この授業に乗った。スタイロフォーム(硬質の発泡素材)をスチロールカッターで切るという新鮮な造形行為や、見てくれるたくさんの人を励ますんだという意味が



「手のひらを太陽に」プロジェクトより

授業中に広がった。そしていつのまにか、制作することで、子どもたち自身の心がたくましく成長していたことに気づき、そして何よりも子どもたちが癒されていることがわかったのである。

——いのちのかたち 12——

やはり、震災10年をテーマとして、選択授業で美術を選んだ子どもたちが制作した作品である。

「『いのち』ということばを使うとき、どんなとき?」。子どもたちは、いのちということばにつながる文を一人ずつ考えた。「いのちがイチバン」、「いのちが輝く」、「いのちを燃やす」——、たくさん出てきた。神戸の人たちは、1月17日、この「いのち」ということばをかみしめる。かみしめてまた歩きだす。造形を通して「いのち」ということばを子どもたちの心に残したいという思いから、この制作が始まった。いのちの形は、難しい。子どもたちは、「どんな形をしているのだろう」と頭をひねり、時には思いつくままに、形を組み合わせさせていった。最初につくったいのちにつながる文のイメージに近づけようと努力した。

黒のスチレンボードに展示された12点の作品は、一編の詩のようになった。また目に飛び込んでくる抽象的なレリーフの色と形とその下に続く文字が、ことば遊びのようなリズムを生んだ。見に来てくれた人が、口ずさんでくれていたらうれしい。「いのちが生まれる、いのちが弾む、いのちを慈しむ、いのちを育む、いのちを守る、いのちが燃える——、いのちを励ます」心が悲しいまでも美しく澄んでいくのは、私だけなのだろうか。

4. おわりに

第4回アートフェスティバルは、無事に終わった。私は、神戸の図画工作や美術の先生方の頑張りをいつでも誇りに思っている。このアートフェスティバルは、ここに至るまで、



「いのちのかたち12」

私たちの先輩方による多大な尽力があった。各校種で別々に開催されていた造形展をひとつにまとめたことで、幼・小・中・盲聾養護学校との連携の重要性が見えてきた。

県立美術館のギャラリーという器のすばらしさも幸いしている。実施する上で、何度も企画運営委員会が開かれ、テーマが決まり、各校種で動き出すというシステムもできあがった。だからこそ、子どもたちの作品から生きている喜びが発信されるのである。

ところで広島や長崎が戦争に対する悲しみや怒り、戦争の悲惨な中から立ち上がってきた人間の英知を発信続ける街であるなら、神戸は、あの震災を通してやはり人間のいのちの輝きを、災害に負けない人間の不屈の精神を発信し続けなければならない使命があると思うのだ。この街の教育の根底には、そんな思いが込められているのだとも感じている。ならば、図画工作や美術の授業で、そのことを考え、そのことをテーマとした授業を研究・発信しなければならないとも考える。

アートフェスティバルで子どもたちからもらった、生きている喜びを、いのちの輝きのすごさを、今日も授業で子どもたちに返していこう——そんな思いがふつふつとわいてきたところで、終わりにする。(にしぎき わたる)

第4回 神戸っ子アートフェスティバル

- 会期：平成17年1月25日(火)～30日(日)
- 会場：兵庫県立美術館「芸術の館」ギャラリー
- 全神戸市立幼稚園、小学校、中学校、盲・聾・養護学校の造形展
- 出品点数：約5,000点
- 鑑賞者数：約19,000人

教科書新時代

武蔵野美術大学教授 大坪 圭輔(著者代表)

●教科書の世界

中学校美術の教科書は、表紙や裏表紙を含めても1冊44ページ、3冊の合計でも132ページです。中学校の9教科の中で最も少ないページ数であり、その文章の量だけを取り上げてみると、他との比較にならないほどです。しかし、平均すると1冊あたり250点を超える写真や図版は、9教科中、群を抜いています。

このような教科書は、我が国の教科書の影響を受けていると言われるアジアのいくつかの国を除くと、世界中を探してもそう簡単には見つかりません。そして、それが中学生のものであろうと作家のものであろうと、掲載されたひとつの作品には、つくった人の思いやその時代の息吹、表現を支える物や技術など、実に多彩な要素が含まれます。そうすると、わずか44ページとはいえ、そこに示される世界の広さは計り知れません。

●中学生の造形環境

しかしながら、太古の造形から現代のポップカルチャーまで、数万年に及ぶ人間の営みを凝縮することは、1000点の図版を用いても簡単なことではありません。今回、私たちが教科書の基本的なコンセプトを練りあげ、題材を設定し、作品を選択する上で、最初に考えたことは、現在の中学生が今どのような造形環境にあるか、という問題です。

「漫画」が中学校の教科書に登場し、社会的な関心を集めてからすでに4年が経過しました。また、写真やCGによる学

習も普及してきました。このように、中学生の実生活に比較的近いところにある造形が学習の内容あるいは方法として取り上げられながら、はたしてそれらに関わる中学生の姿勢に変化はあったのでしょうか。

漫画やアニメーションが現代の日本文化を象徴するものとして海外で高く評価され、CGを用いたゲームはますます精巧になり、「食玩」に代表されるフィギュアは造形芸術としての地位を得ようとしています。このような刺激的な造形環境にある中学生は、それらを楽しみ、自分たちの領分として見られるかのように見えます。しかし、少し掘り下げて観察してみると、大衆文化の消費者として、大人たちの巧妙な宣伝に右往左往させられている中学生の姿がそこにあります。

●判断力のために

自分で論評をすることや、価値判断することを好まない、むしろ苦手とする傾向が私たちの社会にはあるようです。故に、ブランドや流行が幅を利かせ、マスメディアから絶え間なく流される宣伝は大きな影響力を持つことになります。確かに、我々大人にとっても自分自身の価値基準をつくり上げ、それによって行動することは難しいことです。また、それが偏狭であったり、独善的であったりしてはなりません。

中学校の段階は、一生を通して育て上げていく判断力や自身の価値基準の土台を築くときであると言えます。それだけに中学生に手渡すものは、質の高さはもちろんのこと、多様性を持つものであるべきです。

●A4判の意味

今回の教科書はA4判を採用しました。多いとは言えないページを有効に活用し、質の高い、多様性のある学びを保障する題材や作品を提示するためには、B5判からA4判への移行は当然の判断であったと思います。それは、単に掲載作品の大きさの問題だけではありません。ひとつの題材が成立する上で必要な要素、例えば学習の目標を明示すること、学習の方法や表現の手立てをわかりやすく示すこと、他の題材との関連や発展的な学習を促すための知識情報を豊富にすることなど、まさに質と多様性のための大型化です。



「ドラムスと私」生徒作品(埼玉県)

●「1」「2・3上」「2・3下」の関係

かつての『美術2』『美術3』が『美術2・3上』『美術2・3下』となり、中学校2年時にこの2冊を配本するシステムが採用されてから、今回は4回目の改訂となります。しかしながら、「上」「下」2冊の扱いには未だあいまいさが残っています。そこで今回の改訂では、その関係をはっきりさせるとともに、同時に2冊配本というシステムを学習の深まりと多様性に活かすことにしました。

まず、『美術2・3上』では、表現題材に多くのページを割り、『美術2・3下』では、「上」で学んだ内容を深めたり、発展させたりする鑑賞題材を中心にして構成しました。限られた授業時間の中で、質の高さと多様性を確保し、学習の深まりを求めるには、学年を超えて題材の関連性を考えた授業を計画する必要があります。

また、「上」「下」の関係を明確にすることは、『美術1』の学習目的を明らかにすることでもあります。それは入学したばかりの中学校1年生が、期待と希望、そして意欲を持って中学校美術の扉を開くことができるようにすることです。『美術1』の最初には、小学校図画工作での学習と中学校美術での学びを関連付けて考えるページを設定しました。「造形あそび」など、小学校での伸びやかな造形表現の体験を振り返り、その自信を中学校美術の学習意欲へと育ててほしいのです。

●日本、アジア、西洋そして現在

ビジュアルポップカルチャー世代である中学生の学習にポップカルチャーそのものを生かすことは、単に興味関心の問題だけではありません。現在という時代とどのように関わ合うのかという学びの基本的な問題でもあります。しかし、それは目前にあるものだけを対象とするだけで答えを得られるものではありません。

今回は、多くのポップカルチャーとともに、墨による表現の学習や、日本画についての基礎的な知識とともに鑑賞を深

める題材など、日本の美術や伝統も多く取り上げました。日常的にそれらと触れる機会の少なくなった中学生にとっては、むしろ新しい世界かもしれません。

また、アジアの美術も充実しました。日本の美術をアジアという枠の中で見ることは、新鮮な発見と出会いを中学生にもたらししてくれます。さらに、美術の歴史を学ぶページでは、日本、アジア、西洋の美術の関連や違いを比較しながら学習できるようにしています。

これらはまさに現在という時代と自分との関わりを広げ、深めさせることにその目的があります。美術の歴史を人間の歴史として学ぶとき、その終着点は、現在を生きる私たちに結実するのです。そして、中学校3年間の学習の締めくくりとして、『美術2・3下』の最後では、美術の授業で学ぶ力とは何か、それを生かすとはどのようなことかを考える未来のためのページを設定しています。

●教科書新時代

教科書に対する社会の関心はますます高まっています。それは学習内容の質や量についての関心だけではありません。社会全体の知の集積として教科書の存在を捉え直そうとする時代にあるのです。

教科書は、生徒が学びやすく、先生方が活用し易いものであることが第一です。しかし、教科書にはもうひとつ大切な意味があると思っています。それは、中学校3年間の学習だけのものではあってはならないということです。学習指導要領が美術科の目標としている「美術を愛好する心情を育てる」、「心豊かに生きることと美術とのかかわりに関心を持つ」ことの具体的な形として、中学生が卒業後も手元に置いておきたい本であるべきだと思うのです。教科書が社会の文化リソースのひとつとして広く長く活用される、「教科書新時代」であってほしいと願っています。(おおつば けいすけ)



平成18年度用
開隆堂中学校美術科教科書(表紙)

※作品だけを示すのではなく、美術が常に人とともにある姿を示しています。



「美術室の時計」生徒作品
(神奈川県)



1 小学校「図画工作」と中学校「美術」の連携を大切にしています。

開隆堂版美術科教科書では、小学校「図画工作」から中学校「美術」への導入を丁寧に扱っています。「美術1」では、巻頭の見開き3ページにわたって図画工作科学習活動の振り返りと、中学校美術科での成長した姿を同時に提示し、学習の見通しを見せています。また本題材では、小学校で学んだ技法を使った美術科での作品を提示し、生徒が親しみと憧れをもって美術の学習に主体的に取り組み、表現する喜びや楽しさを味わうことができるようになっています。

2 魅力ある題材を、発達段階にあわせて系統的に配列しました。

それぞれの題材に学年を横断して系統性を持たせることによって、「美術1」で学習した内容を「美術2・3上」で深め、同時に「美術2・3下」で整理・発展させることができました。

新しい中学校「美術」教科書ができました

- 大判化(A4判)により学習内容の充実と見やすさが実現できました。
- 題材ごとに「学習のねらい」を明示しました。
- 「美術1」「美術2・3上」「美術2・3下」は発達段階に応じ一層有機的に関連づけられました。

3 「美術2・3上」と「美術2・3下」で表現と鑑賞の立体的な相互関連が図れるようになりました。

「美術2・3上」「美術2・3下」の2分冊は、2年生の4月に同時配本されます。「上」「下」の順序性はなく、2分冊の内容を2年間で扱うことになっています。そこで2分冊の目的を、それぞれ表現題材中心(「2・3上」と鑑賞題材中心(「2・3下」)のように明確にすると同時に、お互いの題材には有機的・系統的な関連性を持たせていますので、分冊ごとに学ぶだけではなく、2分冊を同時に参照しながらの学習ができるようにしてあります。

4 巻末に見応えのある充実した大型鑑賞資料を完備しました。

- ・「色彩ホームページ」(1/2・3上) 美術学習の基礎・基本である色彩について、2学年にわたって、色相環から日本の伝統色まで充実した内容を扱ってあります。
- ・「西洋美術の歩み」(2・3上) 原始から近代までの西洋美術の流れが一覧できます。
- ・「絵で見る人々の物語」(2・3上) 西洋と日本の群像表現を鑑賞します。
- ・「美術がある、今がある、未来がある」(2・3下) ガウディをとり上げ、生活の中に息づく美術を考えます。
- ・「美術史」(2・3下) 日本、アジア、西洋の詳細な美術の流れ。
- ・「くらしの中のアーティスト」(2・3下) 美術で培った力が日常の生活に生きていることを市井の人の姿に見る、中学生のためのキャリアガイダンス。



開隆堂版「美術」教科書の特徴 Q & A

Q1 中学校「美術」では、小学校「図画工作」でも経験してきた、かいたりつくり出したりする喜びを生徒たちに味わわせながら、中学生として主体的に学習に取り組ませていきたいと思ひます。どのような工夫がありますか。

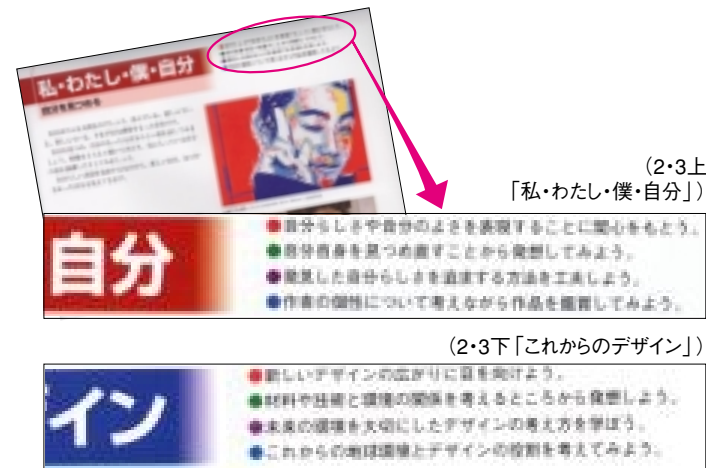
A1 主体的な活動を促すには、学習の目標が明確であることが必要です。中学生は、自分の学ぶ目標が明確であれば、自分のめやすを持って活動に取り組んでいくことができます。開隆堂版「美術」教科書では、全ての題材に学習の目標が明記されています。学習の目標は「関心・意欲・態度」、「発想・構想」、「創造的な技能」「鑑賞」の4観点別に示されていますので、生徒は具体的な学習のイメージを持って活動に取り組め、学びやすい教科書となっています。また、この4観点は、指導者にとっては指導の目安ともなりますので、授業を構造化・説明の際に重要な要素となり、教えやすい教科書ともなっています。

Q2 小学校で学んできた図画工作の力の上に、発達段階に応じて美術の力をつけさせたいと思ひています。どのような工夫がありますか。

A2 小学校図画工作科で培った発想・構想や造形の力などの上に美術科の学習があるとすれば、その関連性を示すことが特に「美術1」では大切な意味を持ちます。開隆堂版「美術」教科書では「美術1」の巻頭3ページを使って、「図画工作から美術へ」というページを設け、小・中学校の作品および活動を並列に扱い、小学校での学習の振り返りとこれから展開していく美術の世界への関連を示してあります。小学校での自信と中学美術への学習意欲につなげていく工夫です。

Q3 美術の表現活動にかけられる実質時間がとても足りない、と感じています。表現活動に取り組める時間を充実させる手立てはないでしょうか。

A3 美術の学習では、準備や後片付けにも時間がかかります。表現活動に取り組む実質時間を充実させるために開隆堂版「美術」教科書では、制作の手順や構想・発想のヒントなどを豊富に掲載することにより、生徒が自主的、主体的に関わることができるようにしてあります。



(1「図画工作から美術へ」)



Q4 美術の学習で素晴らしい作品をつくり上げたり、鑑賞力をつけることは大切なことですが、表現と鑑賞を通して、今中学生として過ごしている日々の生活だけでなく、生涯にわたっての生活を豊かにしたり、美しさに感動する力を培うことも大切と考えています。教科書での示し方はどうなっていますか。

A4 仰るとおりです。中学生の等身大の美術学習のあり方を考えたとき、美術の学習で学んだことを身のまわりへと発展させていくことが大切だと考えています。

開隆堂版「美術」教科書では、「美術2・3上」「美術2・3下」をそれぞれ表現活動(生徒作品)重視、鑑賞活動(作家作品)重視と性格づけ、それまでに身につけた技能を実際の生活の中で生かしたり、その技能がどう美術として社会に生かされているのかを考察したりできるようになっています。

Q5 実際の授業では、どのような制作活動を行うのかも生徒たちの興味・関心が高いところですが、また、作家作品だけでなく、作家の人物像やその制作風景などにも中学生は興味を持っています。教科書では作品以外の内容についてどのように取り上げていますか。

A5 美術の学習が作品づくりという一面だけでなく、中学生たちに受け止めてもらえる工夫として、活動風景なども重視しています。開隆堂版「美術」教科書は、実際の中学校の授業現場で撮影していますので、共感を呼ぶ生き生きとした授業の風景写真を掲載しています。また、作家の肖像写真や制作風景、制作にまつわる言葉なども豊富に掲載することで、作家のエネルギーを伝えるとともに、中学校の興味に応え、美術の学習に意欲的に関わることのできる配慮をしています。

Q6 美術の学習の大切な基礎基本に色彩についての学習があります。小学校で詳細には扱わないとのことなので、中学校の美術ではある程度体系的に扱うことが必要になります。教科書での扱いはどうなっていますか。

A6 美術は、突き詰めていくと、形と色の学習です。色彩は日常生活の中のさまざまな場面で必要とされる知識であり、系統的に進める方が理解しやすいことから、開隆堂版「美術」教科書では色彩学習の資料性を高めて充実し、「美術1」「美術2・3上」の2巻にわたって巻末見開き2ページにまとめ、系統的に示しました。学習のあらゆる場面ですぐに参照できる資料として、また日本画で使用される岩絵の具や、日本古来の伝統色の解説など、中学生の興味を引く内容も盛り込んであります。



(1「素材の魅力」授業風景)



「お泊まりは7人の美女の館」

カボチャドキヤ美術館館長 トーナス・カボチャラダムス

吾輩は、故種村季弘先生を、門司港駅にお迎えしたのである。

門司港駅は、1914年の建築で、世にも珍しいパンプキン様式の駅舎で有名である。90年のあいだに、港は夢のように繁栄し、夢のように衰退した。戦争も、大被害もあった。

「見るべきほどのものは見た。」

月日を経た駅舎は、おだやかな光のなかで、そう言って笑っているように見える。

「先生！お元気そうですね。なんだか若返られたみたいですよ。」

「錬金術では、死は再生への第一歩に過ぎないのだからにやあ。温泉は、母にやる地球の胎水であり、十月もすりゃあ、生まれかわりますよ。」

「足もおありだし、お声以外には、ほんとうに何も変わりません。」

「生きるの死ぬのって、人は大騒ぎするけれど、死んで見ると、それほど違いはにやいものです。何年も何年もかかって、体がだんだん軽くなって、ある日、ふわっと浮遊するんですね。」

荷物(何も持っておられないのだが)を置いて、ひと休みしたいと言われるので、吾輩は種村先生をカボチャドキヤ随一の高級ホテル「ハーレム・ホテル」にご案内したのである。

むかし、門司港が賑っていたころ、「門司の王様」と呼ばれた大親分がいたそう。7つの海を渡ってきた7人の美女を、7つの美しい館に住まわせて、7日のあいだにひとめぐり。おもしろおかしく暮らしたそう。

そりゃまあ、おもしろおかしくてたまらなかつただろうが、その7つの美しい館をホテルにしたのが、「ハーレム・ホテル」である。

1日の宿泊客は、7組に限られる。泊まった館に応じて、食事も、日本料理、中華料理、インド料理、アラビア料理、ロシア料理、トルコ料理、フランス料理と、ちがった料理が供される。調度はもちろん、メイドもそれぞれの国籍の女性を使う、といった贅沢ぶりである。故人であろうが何であろうが、金さえ払えば泊めて

くれるのである。

種村先生をホテルにご案内して、吾輩は栈橋通りバス停から西鉄バスに乗って、「カボチャドキヤ国立美術館」に戻ったのである。なにしろ明日は、「カボチャドキヤ国立博物館」で、「上々颯風」のライブコンサートが行われるのである。

「上々颯風」が、ミュージカル「阿国」の小倉公演のついでに、「カボチャドキヤ国立美術館」で歌い踊ってくれる、というのである。

バカ館長である吾輩は、歓迎のクス玉を造ったり、庭の隅に仮設トイレの穴を掘ったりと、なかなか忙しいのである。

夕刻、吾輩は谷町バス停から西鉄バスに乗って、種村先生をお尋ねしたのである。

「いやあ、よく寝た。おなかへったにや。ビール飲みたいにや。」

「死んでも、ご飯食べたり、ビールを飲んだりするのですか？」

「生きてた時よりうまいくらいさ。糞も出るし、小便もする。ふぐが食いてえにや。」

「じゃ、『温泉連絡船』で唐戸に渡りますか？」

「『温泉連絡船』？」



「かぼちゃのブルーゲル」油彩 1999年 164×178cm カボチャドキヤ国立美術館(門司市)蔵 左下に見えているのが「温泉連絡船」。

造形ピックアップ



指導と自由…2つの自由

絵画教室「アトリエ・コパン」主宰・
宮城教育大学非常勤講師

新妻 健悦

「今日は好きなように自由にね！」などと話そうものなら、子どもたちからは一斉に歓声が上がります。一見、彼らの主体性を刺激し意欲をそそる光景のように見えます。しかし、一方では「指導の意義が揺らぐ」の声となることもあり、以前から燻この問題をあえて取り上げてみました。

造形活動ではオリジナリティーが称揚され「自分の好きなように一自由につくる」が前提とされます。「自由」はとても魅力的な響きを持ち、創造性と対句のように扱われもします。

ところで、子どもたちが歓声を上げるその「自由」には、実は、2つの相違が考えられますが、しばしば混同されているようです。1つ目は、他者の干渉を受けずに自分で好きなようにつくる「不可侵の自由」であり、2つ目はイメージやコンセプトなど「制作内容が自立しているという自由」です。この両者の「自由」は、国家や制度下における社会的存在としての人間に関わる自由と、個的存在としての人間の内部に起因する自由とに分けて考えることができます。

実際の制作の様子では、心の解放と等しく自由を欲して開始されますが、意外にも、いつものパターン化・硬直化した形象を繰り返します。手が覚えたかき慣れた形象等、自分の保身に沿う内容となっていくようです。私たちの脳の中に誕生時より構築し続けてきた生存に関わる視覚情報処理のシステムが強く影響するためでしょう。また他者への伝達や評価に捉われた内容となるのも、一方ではその像が社会的な合意

像として作用するからと考えられます。気持ちは自由であっても「不自由な内容」へと閉ざされていることに気がつきません。

さて問題の「指導」ですが、学ぶ・知ることからは世界の枠組の拡大が提示されます。技法・技能の習得も拡大の方法やツールとして有用です。そのため指導ではつい枠組の獲得だけを急ぎ、それが教育の最終目標となりがちです。しかし、やわらかい枠組で成り立つ造形活動では、本来、社会的存在者としての立場と同時に、個的存在者としての自由への志向が認められます。教育は、一人の人間の中で揺れ動くこの2つの立場について配慮する必要があるでしょう。確かに、従来からの基礎・基本の内容は社会に有益な観点によるものですが、個人に添う内容も無視できません。そのためには個々が獲得した枠組を大きく緩めてあげるような教材開発、教授法の見直しも必要で、また既得枠の価値を転換する発想法も効果があるようです。肝要なのは、新しい枠組(世界)の提示と同時に、その枠を壊すことも辞さない外へと向かう探究心を後押しすることでしょう。探究心は創造性を牽引し、精神の冒険を促します。指導によって「自由」が覚醒されるとすれば、教育の使命の深部には「自由への保証」が隠されていると考えられます。

私自身の活動歴を振り返ると「制作内容が自立しているという自由の獲得」を支援してきたように思います。はじめは保身や合意像に縛られていた子どもたちも、やがて柔和で夢中な姿に変わります。率直に心を開き、しかも独創的で達成感にもますます貪欲となっていくようです。それは探究心旺盛な本来の子ども像として映ります。「自由…」の重要性は子どもたちの自己を大切に育み成長していく様子から教えられたように思います。

(にいつま けんえつ)



「文字を創る」
小学校5年生
女子